

2023

8

# ナイル

現代短歌ナイル

【今月の歌】

須藤滋子、長谷川杏莉

\*\*\*

ナイルキャンパス／五代目神田伯梅

\*\*\*

6月号作品批評／宮本史一(心の花)

\*\*\*

気づきの「けり」／二方久文

\*\*\*

一枚の絵／住谷眞

\*\*\*

忘れられない私の一冊／窪添康子



# NILE CAMPUS

290

伯梅閑話 — 幽霊先生 —

小村井敏子（五代目神田伯梅）

昔話が好きで、生徒に怪談を話して「幽霊先生」と呼ばれていた私に、伯龍は、私の愛読書でもあった「雨月物語」（千代夫人が、崇徳院の怨霊の出でくる「白峰」を講談にしたという）や昔話を演じるといいと言ったが実現しなかった。

授業中に話していたのは、日本の怪談、「雨月物語」、中国の怪談、「聊齋志異」、講談になつてゐる中国の「牡丹燈籠」（三遊亭圓朝作、怪談「牡丹燈籠」のもとになつた話）などだ。もちろん、あらずじ程度の内容を怖そうに話していた。

伯龍は、真打の修羅場だと言つて。「木村又蔵姉川の駆付け」をほんの少し、教えてくれたのだった。教わつた言葉の中に「草もゆるがぬ照る日影」というのが印象的だった。影は、光と陰の二つの意味を持つ。この日影は、日の光ということだ。風が全くなく、夏の日差しが照り付けているということだ。せっかく、教わつたので、一人で運転中などに、時々、復習している。大声を出すと元気になれる。

高校の教師をしていた頃、最初の夫とつきあつていて、私にとつては苦しい時だった。前途の多難が見え見えで、この人と結婚したい人はいないのではないかと思つていた。その人が結婚したいという。ずいぶん、やめた方がいいと伝えたのだが、彼が思いとどまることはなかった。のちに思えば、日展に毎年のように入選する人との結婚に価値を置く方なら結婚したいと思つただろう。残念ながら、私はそういう価値観を持つていなかった。彼の仕事は彼の価値であつて、妻の価値ではないと思つていたので。

そんな苦しい時にありがたかつたのは、勤めていた高校の創設者の先生が詩吟がお好きで、毎朝、放送を通して詩を吟じ、生徒に漢詩を大声で吟じさせていたことだ。担任の私も生徒と一緒に吟じた。元々、漢文が好きだったので、気持ちよく吟じられた。